写真で記録する佐野一彦

佐野一彦はなぜ写真を撮り続けたのか。

「いなかがこの五、六年の間にひどく変わって、今年の秋などもう麦田を牛でおこす人がなくなりました。スライドは、今年からでは、もう遅かったのです。･･･」

「春秋の折り目のある生き暮らしは、今はかえって毎日ゆとりのない、気ぜわしくいそがしい生活になった。･･･農村は農村でありながら、その面目を失いつつある。･･･昔の人のもっていた土着の根にひとりでに体得する知恵は失われゆくかと危ぶまれる。・・・」

（佐野一彦「伊深日記」及び『伊深小学校百年史』より）

それまで季節の移ろいのなかで周りの人たちと支え合うという、あたりまえでありながらも大切にしてきた「くらしの豊かさ」がまさにその時消えつつあることに佐野は気づき、危うさを感じていました。

つつましくていねいに生きている人々の記録が、私たちの生活に大切な何かを教えてくれますように、そして次の世代へ受け継がれていきますようにと願い、佐野は7000枚もの写真を撮り続けたのです。

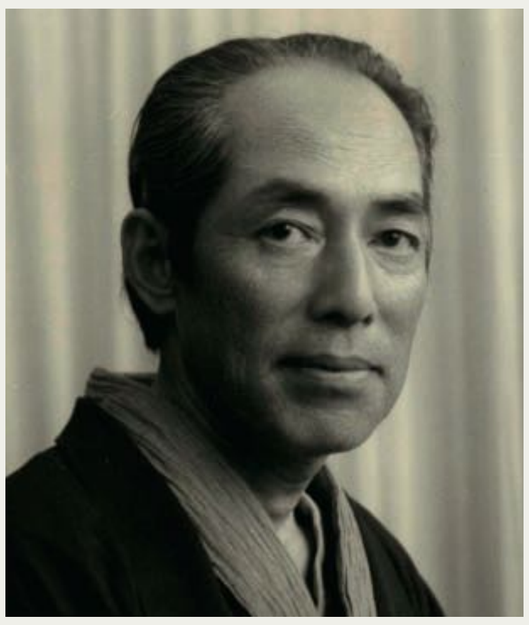
嫁入り(五)　昭和38年2月1日

水およぎ(一)　昭和39年7月31日

牛でしろかき　昭和38年7月1日

まつごかき(五)　昭和38年3月6日

佐野夫妻と伊深の人々　時期不明



佐野一彦

［略歴］

佐野一彦(1903～1997)は、東京生まれの哲学者です。ドイツ留学後、神戸商業大学(現神戸大学)教授などをつとめる一方、文化史、社会学、民俗学などの研究を深めました。1945(昭和20)年3月、加茂郡伊深村(現在の美濃加茂市伊深町)にえんね夫人ら家族とともに疎開し、やがて定住します。民俗学の視点からみた里山のくらしの光景や身の回りの植物の写真を7000枚あまり撮影したほか、日々のできごとを克明に書き記した「伊深日記」(全310冊)を残しました。佐野が見たもの、聞いたもの、感じたものの記録は、全国的にも極めて貴重なものといえます。